

## 「ボランティア活動に参加して」

長谷川栄一

「ボランティア活動は誰のため？」

今回、宮城県石巻市十八成（くぐなり）浜での鍼灸ボランティア活動に参加して、いろいろな事を考えさせられました。今回のボランティア活動には、被災して困っている人の少しでもお役に立てればとの思いで参加したのですが、参加して初めて、ボランティア活動は、人の為でなく、自分の為にあるような気がしました。被災者の方々とお話しをして、自分の中の何かが変わった様な気がします。これは、僕に限ったことでなく、参加した若い人たちの多くが、自分を見つめさせられたと感想を述べていました。生きることの大切さや、決断力の必要性、家族との絆など、被災者の方々からいろいろな事を教わりました。助けに行ったつもりが、助けられていることに気づきました。

「ボランティア活動は社会人としての証明」

最近、自分さえ良ければ良いと言うような風潮が拡がりつつあるように思えます。大人の社会でも、子どもの社会でも、そういう考えの方が多くなっているように思えます。今回のボランティア活動に参加したのは、41名、スタッフも含めると44名が参加しました。その2/3は、20代の若者で、初めて参加した人たちがやはり2/3くらいでした。先にも述べましたが、その多くが感動していました。被災者の話に涙している人もいました。ただし、その涙は被災者に対する涙ではなく、自分自身に向けた涙でもありました。私たち鍼灸師も、鍼灸師である前に社会人であることを自覚し、証明しなければなりません。社会で認められる鍼灸師にならなければならないと思います。そのためにも、ボランティア活動に限らず積極的に社会活動に参加すべきだと思います。

「笑顔の奥の悲しみや苦しみ」

被災者の方々とお話しをしていると、皆さん笑顔で答えてくれます。東北の人は我慢強いとか、辛抱強いと言われていますが、本当にそうでしょうか？。目の前で子どもが流されていった母親、夫婦で杭にしがみついて、奥さんだけが流され、助けることも出来ず「ごめんな！、ごめんな！」と叫ぶことしかできなかったご主人、母を助けに戻り濁流に呑まれていった息子さん、そして取り残された遺族の方達、2年や3年で、その悲しみや苦痛や、後悔は忘れられるものではありません。それに加え、家を建て直すことも出来ず、仮設住宅に住み続けなければならない人たち、彼らの苦しみや悲しみは今も続いているのです。笑顔の奥に隠された悲しみや、苦しみを、私たちは理解してあげなければなりません。私たちのボランティア活動で、彼らの深い悲しみや苦しみを救うことは出来ません。ただ、私たちの活動で一時でもその悲しみや苦しみを忘れて頂ければ・・・、それを願うのみです。また、これから、私たちが彼らに何をしてあげることが出来るのか、真剣に考えていかなければならないと思います。

「東京オリンピックと震災被害者」

それにつけても、東京オリンピックの開催が決まり浮かれている日本、「何かが違う、何かがおかしい」という気がしてなりません。復興に必要な建築資材も高騰していると聞きます。最近では、マスコミが東北の被災者のことを取り上げることもなくなりました。もう過去のことと、割り切ってしまったのでしょうか。でも、彼らの戦いは今も続いているのです。そのことを私たちは忘れてはならないと思います。

